



統計から社会の実情を読み取る

第116回 生活パターンにおける年齢差の縮小

本川 裕 | Honkawa Yutaka

アルファ社会科学(株)主席研究員

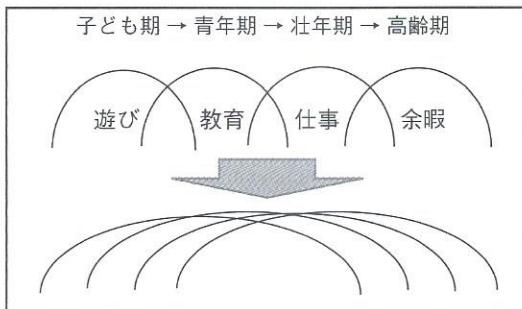
■東京大学農学部農業経済学科卒。財国民経済研究協会常務理事研究部長を経て、現職。元立教大学兼任講師。農業、地域、産業、開発援助などの調査研究に従事。現在は、「社会実情データ図録」サイト(<http://www2.ttcn.ne.jp/honkawa/>)を主宰するかたわら地域・企業調査等を行う。著書に、『統計データはおもしろい!』(技術評論社、2010年)、『統計データが語る日本人の大きな誤解』(日本経済新聞出版社、2013年)、『なぜ、男子は突然、草食化したのか:統計データが解き明かす日本の変化』(同上、2019年)等。PRESIDENT Onlineにて連載を執筆中。



単線型ライフコースの衰退

従来型の人生行路は、子ども期に遊び、学童期に勉強し、青年期に仕事を習うとともに恋愛して家庭をもち、その後、定年まで仕事に邁進し、定年後は、余暇を楽しみながら、後進を指導するなど社会に貢献するという単線型ライフコースのパターンが一般的であった。なお、仕事には家事や子どもが自立するまでの子育てがともなう。

図1 単線型ライフコースから複線型・重複型ライフコースへ



現代では技術や社会環境の変化スピードが著しく速くなったので、このようななかたちで、段階を踏んで人間が成長していくというモデルが時代遅れとなっている(図1、及び参考文献[1]参照)。

まず、何よりも学童期から青年期に学んだ知識や技術がすぐ陳腐化してしまうので、若い頃に勉強して、大人になってそれを生かして仕事をするというモデルはまったく有効でなくなつた。いい例が情報機器である。タイプライターを習得してもパソコンに代替されてその技術は役に立たなくなる。パソコンのキーボードが重要なうちはまだよいが、主たる入力がマウス、タッチパネルへと変遷し、今や、音声入力や考えただけで入力されるというような時代になってきてている。

若いうちにはどんなことでも習得するという習慣さえ養えばよいのであって、実際に使いこなさなければならない技術は何歳になっても覚えなければならないのである。かつて未熟な若者に能書きを垂れていた高齢者は、新技術をい

ち早く習得した若者から使い方を教わらなくてはならない時代になったのである。

「生涯学習」、「リカレント教育」が時代の潮流になっているのはそのためである。こうした教育の新潮流は、生活に余裕ができたので、定年後になって大学に入りなおして勉強するといった悠長なものではない。時代変化のスピードアップから余儀なくされている生き方を示す言葉なのである。

それとともに、結婚や出産や定年などの時期は人によってかなりズレが生じるようになってきている。周りが女性を追い回しているから、それに同調して行動し、結局はみんなで結婚になだれ込むという「昭和」までの習慣は絶えてしまっている。人生の節目に関して「適齢期」というものがなくなってきた。早く親元から独立する者もいれば、いつまでも親に依存して生活する者もある。うかうかしていると婚期を逃す。また、若年出産も高齢出産も選択の問題になりつつある。同級生の行動を見て自分もそれにならうというような時代ではないのだ。離婚も結婚直後には限らず、いつ襲ってくるか分からないので常に注意すべきなのだ。

なかでも大きいのは高齢化に対応した年金制度の維持対策のために年金受給年齢が高年齢化している影響である。いつまで働き続けるかという点についても「適齢期」がなくなりつつあるのである。遊びについても、子ども期や定年後に遊べばよいなどと考えていると、結局一生遊べなくなる可能性が強い。勉強、仕事、家事をしながらも時間を見つけて遊ばなければならぬ。

年齢別ロールモデルの崩壊

このように、遊び、勉学、仕事、家事、余暇という順番で年齢別にはっきり分かれていた単

線型の生活パターンが、幼年から中高年にかけていずれの年齢でも濃淡はあるもののすべてを行う複線型・重複型の生涯モデルに変化しつつある中で、年齢ごと、世代ごとのロールモデルも衰退してきている。

若いうちは好きなことをやって、その後、結婚し家族ができ、社会的にも責任のある立場となると、自分のことというより、周りの人のことを考えて行動するようになる。というのが一般的な人の生涯経路（ライフコース）だと考えられてきた。しかし、もはや、そうした考えは通用しなくなりつつある。

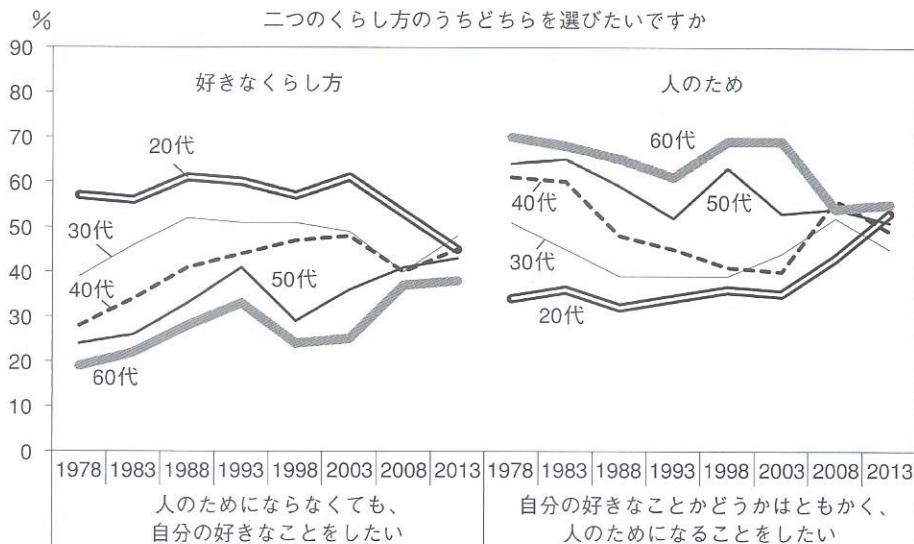
同一設問で長期的な意識調査を5年ごとに継続的に行っている統計数理研究所の日本人の国民性調査では、「自分の好きなことをしたい」か、それとも「人のためになることをしたい」かというシンプルな調査項目をもうけている。図2では、この設問に対する年齢別の結果の推移を追ったが、これを見るとその傾向がはっきり理解できる。

1978年には、若者は自分の好きなことをし、中高年は人のために生きるという意識の違いがはっきりしていた。

1993年にかけて、いずれの年齢でも自分の好きなことをしたいという意識が強まるとともに年齢別の差は縮まった。一方、また、人とのためという意識も全体的に弱まるとともに年齢差も小さくなかった。1993年までは、まだバブル時代の精神的影響が大きかった時期であるが、そのためでもあろう。ちなみに「おいしい生活」というキャッチコピーがコピーライターの糸井重里によって考案されたのは1982年である（翌年まで西武百貨店のコピーとして使用された）。

それ以降、2013年にかけて、さらに、この傾向、なかでも年齢差の縮小がさらに進んだ。

図2 好きなくらし方か人のためか



資料) 統計数理研究所「日本人の国民性調査」

30代までの若年層は人のためをより重視するようになり、40代以降の中高年はますます自分本位に生きようと考える者が増えている。そして、何と、20代の若者については、好きなことより人のためを重視する者が多くなるという逆転現象まで生じている。

世の中、変われば変わるものだという印象がぬぐい得ない。

なお、こうした動きを踏まえて、本連載の第113回（2020年12月号）「高齢ドライバーによる交通事故の動向」では、高齢者の事故が実際に増えていると思いがちなのは、旧来型の年齢別ロールモデルが刷り込まれている年代の人間にとって高齢者はどうしても「身勝手」に見えてしまうからだととらえた。

ステーキばくばくの高齢者？

時代が大きく移り変わり、以上のように若者と高齢者の意識差は大きく縮まっている。とこ

ろが、縮まっているのは意識差だけでなく、食事の量という生理的なものにまで及んでいる点について最後に紹介しておこう。

図3には、厚生労働省「国民健康・栄養調査」における摂取カロリーの推移を年齢別のデータが得られるようになった1995年以降について示した。それまで世帯主の年齢別にしか集計されていなかったのが、この年から、世帯全体の食事内容を世帯員各人別に按分して調査する方式に変更されたのである。

働き盛りである20～59歳の摂取カロリーは、この20年余で、2100カロリーから1900カロリーへと1割ほど傾向的に減少している。

何故、成人層の摂取カロリーはこのように減少しているのであろうか。これは生活や労働において消費カロリーが少なくなっているからと考えるほかない。すなわち、肉体労働自体が減ってきていているのに加え、クルマやエスカレーターなどの普及で筋肉運動が機械に代替さ

図3 年齢別のかロリー摂取量の推移



資料) 厚生労働省「国民健康・栄養調査」

れてきている動きが影響していると考えられる。ITやネットが発達し、無駄な動きをせずに済むようになったためでもある。

これに対して高齢層である60歳以上の摂取カロリーの動きは鋭いぶんと違っている。60歳以上の減少の傾きは緩く、以前は20~59歳よりかなり少なかった摂取カロリーが近年は同等に近づき、2019年にはついに逆転した。摂取カロリーから見て、高齢者とそれ以外の成人との差は急速に消失したのである。

高齢者は退職後の者が多く、もともと身体を動かす必要が非高齢者より少なく、消費カロリーも多くなかったので、摂取カロリーも少なかつたのであるが、非高齢者も高齢者と同じようにあまりカロリーを消費しなくなったので、両者が近づいてきたという要因が考えられよう。

さらに、高齢者の労働力率は2005年前後に低下から上昇に転じている。働く高齢者が増えて消費カロリーが増えたので、両者の乖離が狭

まったというのがもう一つの要因であろう。つまり、身体的に若返った高齢者が、長寿社会に対応して社会における活躍期間を延長し、その結果、よく食べるようになったので、差が縮まったという側面もある。「目刺しだれ茶漬けさらさら」という高齢者食のイメージは今や時代遅れで、むしろ「ステーキばくばく」というイメージさえあながち見当外れでもない状況が訪れているといえよう。

単線型ライフコースから複線型・重複型ライフコースへの転換を、上では、主として技術進歩のスピードアップで説明したが、生理的な身体的制約を緩和する都市環境の発達や健康寿命の躍進がその転換を底支えしているという面も無視できないのである。

*参考文献

- [1] 余暇開発センター編 (1999)『時間とは幸せとは・自由時間政策ビジョン』通商産業調査会.